海神の子どもたち～過酷な儀式のある海辺の町で育った双子姉弟の話～

リチャード諏訪部

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
海神の子どもたち～過酷な儀式のある海辺の町で育った双子姉弟の話～

【Ｎコード】
Ｎ１８３４ＫＸ

【作者名】
リチャード諏訪部

【あらすじ】
小学６年生の女の子、礒崎美穂（いそざきみほ）は腹部の病気で入院している。ある時、彼女は病室で仲良くなった同学年の少年、浦川翼（うらかわつばさ）が看護師に体を拭かれているところを見てしまう。ある部分が普通の子供と違うことに気づいた美穂は、面会に来ていた翼の双子の姉・愛に尋ねてみる。そこで愛が語った真相とは……？
ちょっと痛そうな話なのでお気をつけください。

通過儀礼をテーマにした話です。
舞台としては９０年代あたりの架空の日本を想定しています。

（前書き）

これは架空の日本が舞台です。
実際にこんな儀式をしている地方はないと思っていますので、よろしくお願いいいたします。

（痛い、痛い……でも、ようやく歩けるようにはなってきた……）

腹部の手術痕をさすりながら、小学6年生の少女――礒崎美穂（いそざきみほ）――は、病室のベッドの上で物思いに耽っていた。

病院に運ばれた翌日、手術すると告げられた時には怖くて泣きじゃくり、どうしようかと思ったものだ。それを励まして救ってくれたのが――同室の男の子、翼だった。

「手術ね……別にそんな怖いもんでも痛いもんでもないから心配すんなよ。終わったらオレもお祝いしてやるからさ！」

あっけらかんと翼は言う。彼は同じ6年生で、腕の骨折で入院しているらしい。

しかし、なんであんなに余裕なんだろう……同じ6年生なのに何がわたしと違うんだろう、と美穂は思った。

結果的にそれに勇気付けられて気を落ち着けられ、無事手術も成功したのではあるが……。その後も翼とはお互いの学校や友人の話をしたり、さらに仲を深めていったのだった。

そんな入院生活のある日。隣のベッドの翼が看護師に体を拭かれていたのを美穂は見てしまう。

「あら～、美穂ちゃん見ちゃったの？　まーいっか。翼くん、まだ小学生だしね。別に恥ずかしくないでしょ！」

現代的な価値観ではまずありえないことだが、この時代にはまだままあったことだ。翼を脱がした看護師は美穂を気にも留めず、タ

オルで体を拭き続ける。
そして美穂は知ってしまった。
翼の性器が、いわゆる子供の性器とは違う形であることを。
陰毛も生えていなければ、大きさそのものも普通の小学生とそこまで変わりがない。しかし……薄桃色の亀頭が完全に露出し、カリ首がしっかりと張り出していた。
（えっ、なにあれ……パパのおちんちんみたいな形……子供でもああなることってあるの……？）
美穂は偶然見てしまった翼のペニスに心を囚われ、しばらくベッドの上で悶々としていた。
翼に話しかけられても、気分は上の空。
そんな時……翼の元に面会者がやってきた。
翼の双子の姉である愛だ。学校が終わったら毎日とは言わないが、結構な確率でこうやってお見舞いにやってくる元気な少女。
翼と同じくやや色素の抜けたさらさらした髪を二つ結びにしている。目がくりっとして大きいのも瓜二つだ。
「なんだ、また愛かよー。クラスの誰かだと思ったのに」
「なんだとはなによなんだとは。もうお見舞いにきてやらないぞー？　あ、美穂ちゃん、元気ー？　歩けるようにはなった？」
「うん、なんとかね……」
愛と美穂が会ったのはまだ二回ほどであったが、同年代の女子同

士話が弾み、すぐに仲良くなっていた。
しばらく3人で楽しく話していたが、翼がトイレへ行きたいと言い出した。

「なーに翼ー。おしっこ？　うんち？　早く行ってきなよー！」

「お前ほんっとデリカシーねえな……ちょっとは美穂ちゃんを見習った方がいいんじゃねーの？　まぁいいや、行ってくるよ」

翼は病院内のトイレへとゆっくりと向かって行った。

「……仲いいよね、愛ちゃんと翼くん」

「まーね。生まれてから……ってか、お母さんのお腹の中にいる頃からずっと一緒だし。腐れ縁みたいなものかな？　それより、美穂ちゃんも思ったより良くなってそうで嬉しいよ！」

愛は屈託のない笑顔を美穂へと向ける。
それを見た美穂は……先ほどの一件を思い出した。
なぜ翼のペニスはあんな形になっているのか。

愛なら何か知っているのかもしれない。そして翼がいない今しかチャンスはない。

勇気を出して、美穂は愛に向かって問いかけた。

「あ、あのっ……愛、ちゃん？」

「なーに、どうしたの？　もしかして聞きづらいことだったりす

る？」
「あ、あのね……さっき翼くんが看護師さんに体拭かれてた時に、わたし見ちゃったんだ。翼くんの、その、おちんちんが……お父さんのみたいな形してるって」
愛はそれを聞き、少し目を丸くするが、すぐにいつもの笑顔へと戻った。
「なーんだ、そのことね。これはあたしたちがちょっと前まで住んでたところの伝統？　ってか風習？　が関わっててね。聞きたければ話してあげるけど、ちょっと覚悟しといたほうがいいかもよ？　聞くだけでショック受ける子もいるから」
それを聞き、美穂は少しばかり身震いをした。
もしかしてわたしは、踏み入れてはいけない領域を侵しているのではないか……と。
しかし思春期の好奇心はそれを凌駕する。
もしかしたら怖い話なのかもしれないけれど、それ以上に興味はある。意を決して美穂はうなずいた。
「うん……いいよ。話してくれる？」
「わかった。じゃあ、あたしたちが生まれ育ったところ……潮見町の“儀式“について教えるよ！　あれは1年ちょっと前……小４の修了式だったかな」
――――――――――――――――

「と、言うわけで、これで今年も終わりです！　みんな、１年間ありがとう！」

担任の馬場先生はそう言った後、付け加えるように話し始めた。

「さて、四月一日には皆さんの誰もが１０歳になりますね。１０歳になるということは成人の半分。この潮見町では“一人前になるための儀式“を受けなきゃいけないよね？」

先生は淡々と言うが、翼や愛たち児童の動揺は隠せなかった。

（なあ……アレのことだよな？）

（うん、兄ちゃんがめちゃくちゃ痛いって言ってた……）

子供たちはヒソヒソと話し始めるが、馬場先生は意に介さず話を続ける。

「皆さんはこの町で生まれ育った“海神様の子供たち“です。身体に刻印を刻み、その身の一部を捧げなければならない。これは伝統であり、代々受け継がれる風習なの。分かってくれるよね？　もし儀式から逃げたりしたら……一生一人前としては扱ってくれない」

先生は諭すように児童たちに話していく。

それについて文句を言う子はいなかった。

潮風がやわらかに吹きヤシの木が揺れる帰り道を、翼と愛ともう一人の少年――哲志（さとし）――はしばらく無言のまま歩いていた。

沈黙を破り、ようやく口を開いたのは哲志だった。

「なぁ、例の儀式……どう思う？」

「どう思うも何も、受けなきゃここじゃ人権ないんだろ？　めっちゃ怖いし痛そうだけど、やるしかないんじゃねーの？」

「あたしもそう思う。ホントは逃げたいくらいだけど……それじゃお父さんやお母さんにも恥かかせちゃうしね。哲志はどう考えてるの？」

哲志は少しばかり首をひねった後、こう答えた。

「おれさ、兄ちゃんが2年前儀式やった時のこと覚えてるんだよ。めちゃくちゃ痛そうだったし、その内容は詳しく教えてくれなかった。父ちゃんからお前にはまだ早いからって言われて。でも、しばらくしたら兄ちゃんは男の顔になってたんだよな。それまでの子供っぽい感じじゃなくて。ああなれるなら、おれもやってみてもいいかなって思う」

哲志の言葉が重くのしかかりながら、双子は家へと帰っていった。

先生から貰った儀式の参加証を二人は母親に渡す。

「あんたたちも“コレ“を受けるような歳になったのね……今までよく育ってくれたわ」

母は翼と愛を強く抱きしめ、しみじみと言った。

「辛いだろうけど、一人前になるには仕方ないことなの。頑張ってきなさい」

母は二人にそう伝えた。父もまた同じように同情はするものの止める気は全くなかった。

＊

儀式の前日、翼と愛は隣同士の布団に寝て語り合った。

「愛、まだ起きてる……？」

「うん、なかなか眠れなくて。翼もなんだ」

「そりゃな。オレ、やっぱ怖いよ。明日のことを考えるだけでガタガタ震えちまう……」

「そうだよね。あたしも……何されるんだろうね。でも、海神様に認められて一人前になれるんだよ？」

そっと愛は翼の手を握り、耳元で囁く。

「一緒に頑張ろ？　あたしたち生まれてからずっとそうだったじゃん。双子なんだから」

「……うん、そうだよな。楽しいことも辛いことも、愛とは半分こにしてきたから。今回もそうなるといいな」

ぎゅっと強く手を握り返す翼に、愛は安堵する。

「明日、頑張ろうね」

「ああ……オレたちはホントの意味で、海神様の子になるんだ」

＊

潮見町は太平洋に面した人口二万人程度の漁師町である。気候は南国に近く、４月の初めにもかかわらずシャツ１枚で過ごせるほどに暖かい。

そんな穏やかな天候とは裏腹に、１０歳の少年少女にとってはいささか残酷な儀式は始まろうとしていた。

学校の校庭に医療用トレーラーが何台も運び込まれ、手早く「儀式」は行われる。

男子と女子では受ける儀式の内容も変わるため、最初から別の場所で待機する。当然、翼と愛も離ればなれだ。

「翼、やっぱ緊張してる？」

「そりゃそうだろ……。お前こそ、顔がちょっとブルーだぜ？」

出席番号が近い翼と哲志はトレーラーの前で並んで待機している。軽口を叩きあいながらも動揺は隠せていなかった。

「浦川翼くん、入りなさい」

翼は自分の名前を呼ばれると元気よく返事をしたが、進む足取りは重々しかった。

「じゃ、行ってくるよ……」

「おう、頑張れよ。おれも次だけど……」

翼はトレーラーの中の待機所に入ると、体育着の下とパンツを脱ぐように指示される。

子供とはいえ10歳にもなれば少しは羞恥心というものはある。ためらっていると早くしなさいとの声が飛び、慌てて翼は下着を脱ぎ捨てた。

恥ずかしがっているのも束の間、トレーラーの奥から聞こえてくる絶叫に近い悲鳴に翼は驚かされ、怯えてしまう。

（ちょ、ちょっと待てよ……いったい何したらあんな泣き叫ぶんだよ……やばい、どーしよ、マジで怖い）

逃げ腰になって棒立ちしていると、いつしか静かになっていることに翼は気づく。

（もう終わったのかな……？　次はオレの番か。逃げたい……でも、逃げちゃだめだ。覚悟決めねーと……）

そんなことを考えていると、翼は名前を呼ばれる。

「浦川翼くん、儀式を始めるので入ってください」

「は、はいっ！」

儀式を担当する医師の声はどこか冷たく、乾いているように感じられた。

だが、もうここまできたらやるしかない。緊張でカチコチになりながらも翼は足を踏み入れた。

「うん、なかなか元気がいいね。それじゃベッドに横になって」
医師に言われた通りにベッドに仰向けになって寝ると、翼は皮のベルトで全身をあっという間に固定されるのだった。
（ちょ、ちょっと待てよ……全然動けねえ。もしかして、暴れるほど痛いってこと！？）
「せ、先生……儀式って、何するの……？」
「それは、すぐにわかるからね」
医師は淡々と答える。
そして、彼のペニスに手を伸ばし、包皮を剥けるかどうか確かめていった。
「うっ、くっ……！」
「問題なさそうだね。恥垢もないし、ちゃんと洗っているようだ。偉いね」
この潮見町で育つ男の子はあまり包皮の捲れない子はいなかった。儀式の支障になるからか、そうならないように幼い頃から包皮を剥くように言われているケースが多い。
翼もご多分に漏れずそういう教育を父親から受けてはきていたのだが……やはり羞恥心というものはある。
そして、これにより儀式の内容もだいたい彼はわかってしまった。何かをペニスにするのだろう、と。

医師は翼の余った包皮を引っ張って、器具で固定していく。

「それじゃあいくよ。我慢してね？」

「……！」

ハンドメスを持った医師は手際よく翼の包皮を切り離していった。

鮮血が飛び散り、今まで経験していないような激痛が走る。

「うっ、うわあああ、痛っ、痛いいい！！！」

痛いというよりも、それは焼け付くような感覚であった。たまらず翼は絶叫する。目の前が真っ白になり、脂汗もダラダラと出る。

それを見て、すかさず側にいた看護師がタオルを噛ませる。翼はそれに食らいつき必死で耐えていた。

医師が傷口を洗い流し消毒すると、また翼は痛みで身をよじり、ベルトが軋むような音が鳴る。

（やばい、こんな痛いとか想像もしてないよ……たのむ、早く終わってくれ……）

翼の願いとは裏腹に、儀式はまだまだ終わる気配を見せなかった。

「ううう―！！　ゔゔゔ―！！！」

傷口を縫合されるたびに再び稲妻のような刺激が下腹部を襲い、翼は悲鳴をあげて泣いていた。もう恥もへったくれもない。

それはまさに、気の遠くなるような時間。何度も意識を手放しかけては強烈な痛みで呼び起こされることを繰り返していた。
儀式が終わった頃には、もはや泣き叫ぶ気力すら彼には残っていなかった。
痛み止めを渡され飲むと、顔を涙でくしゃくしゃにした翼はふらふらしながら休憩所の体育館へと向かっていくのだった。

＊

一方その頃、女子たちの列に並んでいた愛。
「次、浦川愛さん。入って」
年頃の女子にとって、医師に裸を見られるのは男子よりも恥ずかしいものがある。それは愛とて例外ではなかった。
羞恥心を堪えながら下半身裸になって、愛はベッドへと向かい横になった。
女子の儀式も男子と同じく、皮のベルトで全身を固定される。
（もう、やだあ……そんなに見ないでよお……てか、何されるのこれから）
消毒液のツンとする匂いに包まれた医療用トレーラーの奥。
恐怖と羞恥心で既に涙目になっている愛のことなど関係ないかのように、医師たちは儀式を進めていく。

まず医師はクリトリスの包皮をつまみ、ラインを引いていった。自分でも触ったことのない秘所への刺激に愛は驚き、思わず身体をよじらせてしまう。

（え、マジでそんなとこ……ん、あん……てか、おまた全部見られてるのあたし……）

そう思っていると、突然燃えるような痛みが彼女を襲った。

医師がクリトリスの包皮にメスを入れていったのだ。鋭利な刃物が少女の敏感な組織を容赦なく切り裂いていく。

たまらず絶叫する愛に、看護師はタオルを噛ませていった。

「んー！　ん゛ん゛ん゛ー！」

声にならない愛の絶叫もスルーして、医師は淡々と儀式を進めていく。

クリトリスの副皮まで切除した頃には、既に愛は息絶え絶えになっていた。

そしてそこを消毒して縫合するのだが……やはり翼と同じように愛も気を失っては痛みで起こされることを繰り返していた。

（お、お医者さんの、手が止まった……や、やっと終わりかな……？）

そう思った愛の安堵は、一瞬にして覆される。

「それじゃ、儀式の仕上げをやるからね。我慢してね？」
医師はそう言うと、包皮切除によって完全に露出した敏感な陰核亀頭をつまむ。
（ちょ、んんっ、ひゃん……！　ここ、触られるだけでこんなになるの……！？）
「ここに穴をあけるから」
（え……うそ、やだやだやだやだ！！！！！）
医師の発言に絶望した瞬間、陰核亀頭のど真ん中にピアス穴を開けられた愛は絶叫して再び意識を失っていった。
「……ちゃん。愛ちゃん！」
「んん、いたたた……看護師さん？」
「もう終わったから、大丈夫よ。おめでとう！」
愛は看護師に声をかけられ目を覚ますと、痛み止めを飲みおぼつかない足取りで体育館へと向かっていくのだった。

＊

新5年生の児童が集まる体育館の中は半分野戦病院と化していた。まだ春休み中だからよかったものの、夏休みだったらどうなっていたことか……と、翼はジンジンする痛みに耐えながらも考えていた。
みんなぐったりとしてマットに横になっている。
水を飲んだり傷口の止血をしたりさまざまだが、やはり元気がな

いし未だに泣いている子もいる。
「哲志……どうだった？　やっぱ泣いたよな？　オレなんて気絶しちゃったよ」
「あはは……おれもだよ、翼。イキって兄ちゃんみたいになりたいとか言ったけど、後悔しそうになった。兄ちゃんもめちゃくちゃ頑張ってたんだなあ……」
「でも、もうオレたちも同じだろ、それは。辛かったけど、これで海神様の子供たちになれたんだ」
「へへ、そうだな……！」
一方の女子たち。
愛は友人の美希とぐったりしながら話していた。
「ここまでする必要、あるのかな？　痛さも恥ずかしさもハンパないよね」
「わたしもそれは思ったけど……終わったからもういいんじゃない？　これで一人前として認められるんだからさ」
美希はそう言うものの、愛は儀式に対するモヤモヤしたものを隠し切れないでいた。
しばらくすると学年主任の先生が体育館に入ってきてスピーチを始めた。
「新5年生の皆さん、お疲れ様でした！　海神の儀式、皆本当に

よく頑張ったね！　これで皆は本当の意味で海神様の子どもたちになれて、晴れて一人前として認められる。誇りを持って生きていけるよ！　君たちから切り取って集めたものは海神様に捧げるから海に撒くことになっています」

それを聞いて翼も愛も、思わず股間に手を当てていた。

失ったものは海神様への供物へ、残る傷跡は儀式の刻印。

それはまさに、子供時代との別れを実感させられるものであったのかもしれない。

露出した秘部が擦れる妙な感覚と儀式の傷の痛みによりおぼつかない足取りでなんとか家に帰った翼と愛は、また母に強く抱きしめられる。

「本当に、本当に無事に帰ってきてくれてよかった……！」

今ではほぼ無いが、かつては女子を中心に儀式中に命を落とすことがしばしばあったらしい。当時は儀式の内容がさらにハードだったことも関係するのだが……それを知る母は生きて帰ってきてくれたことに心から安堵するのも当然のことだった。

その日はいつにないくらいのご馳走が浦川家に並んだ。彼らの家だけではなく、海神の儀式が行われる子がいる家は皆そうであったが……。

夜寝る前、再び布団に並んで手を繋ぎながら翼と愛は語り合う。

「ねえ翼。やっぱり痛いよね？」

「ああ、まだまだね。いつまで続くんだろうな」

「まだ聞いてなかったけど、男子は何されたの？」

「うーん……ちんちんの皮をメスで切られて縫い合わされた。普通に大泣きしたし何回も気絶しちゃったよ」

「ふふ……あたしも同じだよ。わんわん泣いて、何回も気を失って」

「女子の方は何されるんだよ？」

「おまたのとこの皮を切られて縫われて……最後に一番敏感なとこにピアスされるんだ」

「……そりゃまた災難だったな。もしかしたらオレらよりきついかも。でも、よかったよな。これでオレたちも一人前、海神様の子どもたちになれたんだから」

「……そうだね。めちゃくちゃ痛くて苦しくて恥ずかしかったけど、オトナになるってこういうことなのかもね」

「あはは、オトナになるまではあと10年かかるぞ？」

「ふふっ。確かに、あたしたちはハーフウェイラインまできたところ。これからまだまだいろいろあるとは思う。でも……たぶんコレより辛くて怖いことなんてないよね？」

「ああ……そりゃそうだろ。もうオレは怖いものなしだよ！　もう1回儀式やれって言われたら絶対逃げると思うけどな」

双子の姉弟は笑いながら、いつの間にか眠りに落ちていた。
その後しばらくは傷痕やピアス穴のケアを徹底し、露出した部分への違和感に少しずつ慣れて、日常へと戻っていく……。

――――――――――――――――――

「とまあ、こんなことがあったわけだけど……どうだった、美穂ちゃん？」
「いや……世の中って広いんだね。わたしなんてちっぽけな世界で生きてたにすぎないことがよくわかったよ。二人ともすごいね。わたしならとてもじゃないけどそんなの耐えられるとは思えないから。怖くておしっこ漏らしちゃいそうだよ……」
美穂は驚き、そして翼と愛に尊敬の念のようなものを抱いていた。同じ小学６年生の子供なのに、なんだか遠い世界の住人のようにすら感じていたほどだ。
翼が手術なんて痛くも怖くもない、なんて励まし方をしたのも腑に落ちた。彼のような経験をしていれば、麻酔をしてもらえるだけありがたいとすら思えるだろう。
「翼くんはそれで大人みたいなおちんちんになったってことかぁ……まさかそんな理由だとは思わなかった」
すると、愛は美穂のそばに顔を近づける。
「ちょ、ちょっと愛ちゃん！？」

「んふふー。ねえ、美穂ちゃん。あたしのアソコ、どうなってるか見たくない？」

愛からの突然の斜め上な提案に、美穂は動揺を隠せない。

「え、おまたを見せるってこと……？　確かにどうなってるのか気になるけど、恥ずかしくないの？」

「もうちょっとやそっとのことじゃ恥ずかしくないもん。同い年の女の子に見せるくらいなんてことないよ！」

「そ、そこまで言うなら……見せてくれる？」

美穂は誰も周りにいないことを確認し、病室の仕切りを完全に閉める。

「それじゃいくよ……えいっ！」

愛は女児ショーツを脱ぎ捨て、スカートをぺろっと捲りあげる。

「ほら、よく見て……」

「ぴ、ピンクの真珠みたいなのがある……真ん中に銀色の飾りも……これが儀式によるものなの……？」

自分のものとは全く違う愛の女性器を目の当たりにして、美穂は絶句しそうになる。

「このピンクのお豆ちゃんみたいなの……女の子なら誰にでもあ

るんだよ？　何もしなかったら大抵の子は隠れてるみたいだけどね。あたしは儀式で周りの皮を切られちゃったから、こんな風になってる。それでね……」

愛はピアスのあたりを中心にクリトリスをくるくると指の腹で撫で回していく。

「な、なにしてるの愛ちゃん！？」

「ここね、すごくビンカンな場所なんだぁ♡　今はもう慣れたけど、儀式の後はパンツに擦れるだけでくすぐったくてしょうがなかったよ。今でもこうやって、ちょっとこすってあげると気持ちくてね……♡」

恍惚の表情を浮かべる愛を見て、美穂も上気し気分が高揚してくる。

「愛ちゃん……すごくえっちだね」

「よかったらさ、美穂ちゃんも触ってみてよ」

美穂はそれならと、おそるおそる愛のむき出しの秘芯へと指を伸ばしていく。

「あ、ちょっと、ぷにぷにする……」

「んっ……あっ、あんっ♡　いい、上手いよ、美穂ちゃん♡」

じわじわと愛の陰裂は濡れそぼっていく。そんな時だった。

「あのさぁ……お前ら、何してんの？」

二人は少年の声にはっとする。翼がトイレから戻ってきたのだ。

「あ、翼!？　なんでもないよ？　ねー、美穂ちゃん？」

「うん、そうだよね、愛ちゃん」

「なんかヤバいこととかしてるんじゃねーの？　ちょっと聞こえたけど……。一応入らないでいてやるから」

翼は案外気配りが上手というか、空気の読める子だった。愛は素早く着替え直して仕切りを開けた。

「もしかして……海神の儀式のこととか美穂ちゃんに話しちゃった？」

「あ……それは」

「ご、ごめんねっ！　わたし、どうしても気になっちゃって！」

「いや、別に部外者に話しちゃいけないとかそういうルールはないんだけどさ。どこから知ったのかは気になるよな」

それを聞いた美穂は、着替えで見た翼のおちんちんの件からそうなったことを正直に話した。

「なるほどね、まあ気になるよな。オレも転校してきた後の宿泊学習で見られて質問攻めにあったもん。毒キノコみたいとか傷跡がグロいとか言われたのはムカついたけどな」

「やっぱり、男の子同士でもそういうのあるんだね……」

「あ、そうだ。よかったらオレのもしっかり見てみる？　どうせ愛は見せたりしたんだろ？」

「なんでわかるのよ……まあ、そうなんだけど」

「そりゃオレたち、お母さんのお腹の中からずっと一緒だからな。それくらい分かるって」

それを聞いて、美穂の頬はかあっと真っ赤に染まる。

「お、男の子のをしっかり見るって……心の準備が出来ないというか……」

「嫌なら別にいいよ？　オレだってちょっとは恥ずかしいし」

「嫌じゃないよ！　興味はすごくあるから……わたし、えっちな子だよね」

「美穂ちゃんはえっちなんじゃなくて、好奇心旺盛なだけだと思うよ？　いいことだよ。ほら、翼。見せてあげて」

利き腕の右手を骨折している翼は、左手でパジャマの下とパンツを器用に下ろした。

「ど、どう……こんなふうになってるんだけど……」

「うわ……すごい。矢印みたいな形だね。先っぽはちょっと薄ピンクなんだ。これが儀式の痕？　すごく痛そう……」

美穂は好奇心が勝ったのか、無断で翼の幼いペニスに触れていた。
「傷痕のところで色がちょっと変わってる……って、あれ！？　どんどんおっきくなってくる」
翼は美穂の柔らかな手による刺激により、意図せぬ勃起をしてしまった。
「朝起きた時とかえっちなこと考えるとたまにこうなるんだよなー」
「やーい、翼のエッチー！」
「うるせーよ。美穂ちゃんの手がぷにぷにで気持ち良すぎたから。でもさー、こうなると皮が突っ張ってちょっとだけ痛いんだよな」
「え、それ……儀式の後遺症とかじゃないの！？　大丈夫なの？」
「あはは、美穂ちゃん。心配しなくていいよ。ちょっと違和感あるくらいだし。あとさ、ちんちんって皮が無くなると匂いが全然しなくなるんだ。身体洗えてない時でもチンカスとかたまらなくなったし」
「チンカスとか下品なこと言わないの。女の子の前で……って、美穂ちゃん！？」
美穂は意識してか無意識にか、翼のペニスを嗅ぎ回していた。
「あ、ほんとだ……剥けてるおちんちんって匂いしないんだね」

「美穂ちゃん、意外と大胆なとこあるよなー。大人しそうなのに。そろそろしまっていい？」

「うん、見せてくれてありがとうね！」

翼はパジャマを着直して、自分のベッドに腰掛ける。

「でもそこまでして、痛い思いしなきゃいけない理由ってあるのかな？」

美穂の問いには愛が答えた。

「調べたんだけど、こういう大人になるための通過儀礼って他の国とかにもあるんだよね。あたしたちと同じようなことをされたり、バンジージャンプしたりいろいろね。伝統だから逆らえないってのもあるし……まああたしも美穂ちゃんと同じことを思ったこともあるけどね。今でも刃物とか見ると震えることもあるし、儀式の夢だって見るの。ただいずれそれも時間が解決してくれると思ってるし、今ではこれで良かったと思ってるよ」

「そうなんだ……愛ちゃん、なんか大人だね。わたしにはたどり着けない境地かも」

「ま、オレは愛みたいなトラウマなんてないけどな。何がきたってへっちゃらだよ！」

「翼だって儀式の夢見た時には顔面真っ青になってるじゃん。強がらなくてもいいんだよ？」

「そ、そりゃそうだけどさ……ちなみに、オレたち家族はもっと早くこっちに引っ越す予定だったんだ」

「なんで遅らせたの？」

「お父さんもお母さんもさ、儀式から逃げるような真似はさせたくなかったんだってさ。後で教えてくれたけどね。儀式を受けないまま引っ越したら、また潮見町の皆に会うことになった時に顔向けできないって。それで半年くらい引き延ばしたんだ」

人間のプライド？　世間体というやつなんだろうか？

美穂は納得したようなしないような顔で聞いていた。

「あ、そろそろ面会時間終わっちゃうね。じゃあね！」

愛が帰っていくのを見送ると、美穂は翼に話しかけた。

「なんだかいろいろ知っちゃった。今日だけで一週間くらい過ごした気分だよ。改めて思うよ、わたしはちっぽけな狭い世界で生きてきてたんだって」

「オレだって、こっちの暮らしに慣れるのは結構大変だったからなー。田舎の常識ってあんまり通用しないし、お互いさまだよ」

「えへへ……そうだね。翼くんたちと話すとちょっと元気づけられたよ」

ちゅっ。

美穂はゆっくりと翼に近づき、頬に軽く口づけをした。
「う、うわわっ！　何すんの、美穂ちゃん！」
「ふふ、翼くん、ちゅーされるのは初めて？」
「当たり前だろ……でも、嬉しかったよ。ありがとね」
余韻を残したまま、彼らは自分のベッドでその夜を過ごした。

＊

結局美穂は翼より先に退院し、その後会うことはなかった。
月日は流れ――小学校も卒業間際になった頃。
美穂は風呂場の鏡に映る自分の裸体を見ながら、翼や愛のことをふと思い出すのだった。
「ここ……だよね」
美穂は自分の陰部を鏡に晒し、少しはみ出し気味の陰核包皮を摘む。
「こんなところ麻酔なしで切って縫うとか……やっぱりすごいよ、愛ちゃんも」
包皮を捲りクリトリス本体を触ると、ビィィンと電流が体全体を駆け巡るような感覚がした。
「こ、ここにピアス開けるとか……失神して当然だよね。怖すぎ

るよ」

そう思いながらも、愛の女性器を思い出し、開き始めた割れ目はじとっと湿り始めていた。

そして次に翼のことを思い出す。

この数カ月間で彼女もかなりの性知識を身につけていた。もちろん、耳年増ではあるのだが……。クラスの間でそういう話題が増えたこともおおいに影響している。

「あの矢印みたいな硬いおちんちんが、わたしのナカに入ってきたらどうなるのかな……んんっ、うっ、んんん……！　ああっ、あはんっ♡」

自身から溢れ出る蜜を陰核になすりつけ、翼のことを妄想しながら彼女は自慰に耽っていた。

「ああっ、だめっ、くるぅ、んんん♡♡♡」

身体をびくびくと震わせ、風呂場の縁に腰掛けた彼女は小さく絶頂した。

「またいつか会いたいな、翼くんにも愛ちゃんにも。それで、今度はもっと詳しく教えてもらおう」

美穂が潮見町のこと、海神の儀式の真実を知るのはまだまだ先のことであった——。

（後書き）

最後までお読みいただいた方、ありがとうございました！
お気に召したら評価・ブックマーク・感想をいただけると嬉しいです！

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n1834kx/

海神の子どもたち～過酷な儀式のある海辺の町で育った双子姉弟の話～

2025年8月15日02時45分発行